

平成2年12月25日印刷
平成3年1月5日発行

ニーベルンゲン研究史と問題点

(Probleme in der Forschungsgeschichte des Nibelungenlieds)

石川 栄作
(Eisaku ISHIKAWA)

(Kairos 28)

Kairos-Gesellschaft für Germanistik

Fukuoka Japan 1990

ニーベルンゲン研究史と問題点

石川 栄 作

『ニーベルンゲンの歌』は、五、六世紀の古代ゲルマン英雄伝説を素材として十三世紀初頭の詩人によって創り上げられたものである。民族固有の英雄伝説を素材に用いていることから『ニーベルンゲンの歌』は、当時の「宮廷叙事詩」に対して特に「英雄叙事詩」と呼ばれているが、厳密な意味においてこの区別は必ずしも正確ではない。このいわゆる英雄叙事詩もまた宮廷的特徴を有しているからである。『ニーベルンゲンの歌』は素材からすれば確かに古代ゲルマンの「英雄文学」の枠内にあるが、しかし、その成立年代と詩人の内的態度からすれば、シュタウフェン朝時代の「宮廷文学」に属するのである。まさにこの特殊な事情から実にさまざまな問題が生じ、従来の研究も紆余曲折した道を辿ってきたのである。そこで、本稿ではニーベルンゲン研究史を概観し¹⁾、『ニーベルンゲンの歌』研究の問題点を整理することによって、ニーベルンゲン研究の今後の課題を方向づけておきたい。

1. 『ニーベルンゲンの歌』再発見

中世において『ニーベルンゲンの歌』が好評を博していたことは、その写本が三十数種類も書き残されていることから容易に推定される。しかし、十七世紀及び十八世紀前半にはこの作品は全く忘れ去られていた。1618年に勃発した三十年戦争はドイツ文化に全面的な荒廃をもたらし、民族にとって貴重な古文献や諸種の伝説は長い間埋もれたままになっていたのである。『ニーベルンゲンの歌』が再発見されるに至ったのは十八世紀後半になってからのことで、それに貢献したのがチューリヒのボードマー (Johann Jacob Bodmer) である。彼は中世文学に深い関心を抱き、1748年にはコーデックス・マネッセに基づいて『十三世紀の古シュヴァーベン文学選』 (Proben der alten schwäbischen Poesie des dreyzehnten Jahrhunderts) を出版したりしたが、このボードマーの提案でリンダウの若い医師オーベライト (Jacob Hermann Obereit) が1755年にフォーアアルルベルクの

ホーエンエムス伯爵の図書館を訪れたところ、そこで『ニーベルンゲンの歌』の写本——のちに写本Cと呼ばれる——を発見したのである。オーベライトから報告を受けたボードマーは、1757年に『ニーベルンゲンの歌』の最初のテキストを刊行したが、しかし、大きな反響を見るには至らなかった。それは、彼のテキストが『ニーベルンゲンの歌』最後の三分の一と『哀歌』を収録したものに過ぎなかったという理由からではなく、当時のドイツはまだ外国文化への追従時代であり、自国固有の作品の価値を認識すべき基礎ができていなかったためである。ボードマーと同様にチューリヒ出身であったミュラー (Christoph Heinrich Myller) が1782年に『ニーベルンゲンの歌』の最初の完本——ただし、前半は写本Aに基づき、後半は写本Cに基づくという不完全なものであった——を刊行したときも同様である。ミュラーはこれをプロイセンのフリードリヒ大王に献呈したが、大王は、1784年2月22日付の手紙の中でこの中世の作品を軽蔑して、「一文の値打ちもなく、過去の塵の中から掘り出される価値もない、大変そまつな物」と評したことはあまりにも有名である。

このように当初はあまり注目されなかった『ニーベルンゲンの歌』がその後広く受け容れられるようになったのは、まず第一にはロマン主義運動の結果である。ロマン主義者が中世をいかに愛し、解明したかは、ノヴァーリス (Novalis) の『キリスト教世界あるいはヨーロッパ』 (Die Christenheit oder Europa, 1799) などからも十分に知られよう。中世の本来の再発見者と言われるティーク (Johann Ludwig Tieck) は、1803年に『シュヴァーベン時代のミンネ歌謡』 (Minnelieder aus dem schwäbischen Zeitalter) を出版し、その序論で『ニーベルンゲンの歌』にも触れているが、グリム兄弟はこの序論に特に大きな影響を受け、中世文学研究に没頭するのである。

このように『ニーベルンゲンの歌』の関心が高まった第一の動機が、ロマン主義運動であるならば、第二の動機として政治的事情も挙げられよう。フランス軍の侵入によって帝国とプロイセンが崩壊した政治的衰退の時代に、ドイツ民族思想、ドイツ愛国心が生まれ、これが古ドイツ文学に従事するのを助長し、殊に『ニーベルンゲンの歌』は、ドイツ民族的叙事詩として以前よりももっと広い関心を見出した。わずか数十年のうちにこの作品の評価について生じた変遷を如実に物語っているのは、ツォイネ (Johann August Zeune) が1815年に『ニーベルンゲンの歌』の戦陣版を出版したことであろう。多くの若者たちは『ニーベルンゲンの歌』をナ

ポレオンとの戦いに持ってゆくことを欲したのである。

こうしていくつかの動機から中世文学への関心が高まったが、この時期に最も大きな熱意と学問的野望とを持って『ニーベルンゲンの歌』研究に尽力した人物は、フォン・デア・ハーゲン (Friedrich Heinrich von der Hagen) である。1802-3年にヴィルヘルム・シュレーゲル (Wilhelm Schlegel) がベルリンで行なった中世文学の講義を聴いたことのある彼は、『ニーベルンゲンの歌』研究に没頭し、テキストの刊行を何度か企てた。1807年の最初のテキスト刊行は、前述の C. H. ミュラーの刊行に基づいているが、ミュンヘン本 (写本 D) をも使用したもので、全く非学問的な編集であり、中高ドイツ語と新高ドイツ語の不愉快な混合のテキストであった。1810年の「さまざまな写本の異文付きの原語での」刊行も同様にあまり成功しなかった。本質的によりよくなったのがその後の1816年の第三版であり、これをもって彼は初めてザンクト・ガレン本の完全なテキスト (写本 B) を普及させることに成功したのである。しかし、それでもやはりフォン・デア・ハーゲンはその時代の学問的立場の背後にとどまったままであった。彼が初めて完本を出版した同年の1816年には、もう一人の学者によって『ニーベルンゲンの歌』研究の新たな時代が開かれたのである。すなわち、同年5月4日ベルリン大学において、『ニーベルンゲン災厄の原型について』 (Über die ursprüngliche Gestalt des Gedichts von der Nibelunge Noth) という演題で教授就任講演を行なったラッハマン (Karl Lachmann) によってである。この講演内容はただちに公刊されたが、この論文こそ厳密に学問的な『ニーベルンゲンの歌』研究の礎石とも言うべきものである。

2. ラッハマンの歌謡集積説

ラッハマンは、当時完本・断片を含めて全部で三十四種類も発見されていた『ニーベルンゲンの歌』の写本にアルファベットを用いて表示した。その際彼は十三、十四世紀の古い羊皮紙の写本には大文字を用い、十五、十六世紀の新しい羊皮紙及び紙の写本には小文字を用いており、この表示の仕方は今日でも用いられている。最も重要な写本は、写本 A (ホーエンエムス・ミュンヘン本)、写本 B (ザンクト・ガレン本) そして写本 C (ホーエンエムス・ラスベルクあるいはドーナウエッセンゲン本) の三つであり、ラッハマンは写本 A が原典のテキストに最も近いものであると考

えた。その根拠となったのが上記講演で初めて公表された彼の歌謡理論であるが、要するに、ラッハマンは、ヴォルフ (Friedrich August Wolf) の『ホメロス歌謡理論』(Prolegomena ad Homerum, 1795) を『ニーベルンゲンの歌』にも応用して、『ニーベルンゲンの歌』はエピソードふうの内容を持ったもともと独立した個々の歌謡——それらはさまざまな作者によって作られた——の集積、編集によって生じたと主張するのである。この歌謡理論に従ってラッハマンは、ホーエンエムスの写本Aを正本とし、1826年には『ニーベルンゲン災厄と哀歌』(Der Nibelunge Noth und die Klage) と表題をつけてテキストを刊行した。さらに1836年には『ニーベルンゲンと哀歌の注釈』(Anmerkungen zu den Nibelungen und zur Klage) をも公刊して、明確に二十の個々の歌謡に分けることができるといふ趣旨に添って、彼の歌謡集積説を精確に示し、これによってニーベルンゲン研究の権威としての彼の地位を固めたのである。

こうしてラッハマンの文献学的に模範的な『ニーベルンゲンの歌』のテキストと研究書の刊行に基づいて、写本Aは当時長い間権威あるものとして通用していた。写本Aは、多くの欠点のある、軽はずみに書かれた写本であり、まさにそれゆえにラッハマンの歌謡理論には最もふさわしかったのであるが、これと全く逆の考え方をとったのがホルツマン (Adolf Holtzmann) である。彼は、1854年の研究書『ニーベルンゲンの歌の研究』(Untersuchungen über das Nibelungenlied) の中で、テキストに矛盾がなく、出来映えがよいほど原テキストに忠実なものと考えて、写本Cを原典に最も近い写本だと主張する。これは同時にラッハマン的歌謡理論の拒絶でもあり、ホルツマンは、ラッハマンに反対して、「一人」の詩人を仮定することによってのみ説明されうる作品の統一性を強調した。同じ見解を述べたのが、同年に『ニーベルンゲン問題』(Zur Nibelungenfrage) を発表したツァルンケ (Friedrich Zarncke) であり、二人はただちにドーナウエッシンゲン本に基づいてそれぞれに『ニーベルンゲンの歌』のテキストを刊行した²⁾。このホルツマンとツァルンケの新説に対して、リーガー (Max Rieger) は1855年に『ニーベルンゲン批判』(Zur Kritik der Nibelunge) を、またミュレンホフ (Karl Müllenhoff) も同年に『ニーベルンゲン災厄の歴史』(Zur Geschichte der Nibelunge Not) を公けにして、ラッハマン説を擁護し、写本の優位説をめぐる論争も頂点に達したが、一方バルチュ (Karl Bartsch) は1865年の『ニーベルンゲンの歌の研究』(Untersuchungen über das Nibelungenlied) の

中で、写本Bが最も原典に近いものであることを確証し、写本Bに基づいて1870年から1880年にわたって三巻から成る刊行³⁾を企てた。このような混沌とした原典をめぐる論争において、その後最終的な決定をもたらしたのが、ブラウネ (Wilhelm Braune) の1900年の研究論文『ニーベルンゲンの歌の写本事情』(Die Handschriftenverhältnisse des Nibelungenliedes) であり、この研究によって現在では写本Bが最も原典に近いテキストであることが一般に認められているのである。

3. ホイスラーの発展段階説

こうして十九世紀の後半は長い間、ラッハマンの歌謡理論をめぐる論争とそれに関連して個々の写本の価値についての論争で満たされたが、ラッハマンの歌謡集積説が最終的に克服されたのはホイスラー (Andreas Heusler) によってである。ホイスラーはまず1905年の『ゲルマン伝承文学における歌謡と叙事詩』(Lied und Epos in germanischer Sagedichtung) の中で歌謡と叙事詩の相違を明らかにし、両者の関係を喩えてこう言う。歌謡と叙事詩との関係は、個々の人間と人間全体との関係、あるいは個々の木と木の格子垣との関係であるのではなく、胎児と成長した人間、あるいは幼樹と広く枝分かれした大木との関係のごときものであり、個々の歌謡を配列結合しても叙事詩とは成り得ないのである。このような理論に従ってラッハマンの歌謡集積説を否定し、北欧のエッダやサガ等を手がかりとして自らの発展段階説⁴⁾を打ち立てたのが、1921年の『ニーベルンゲン伝説とニーベルンゲンの歌』(Nibelungensage und Nibelungenlied) である。それによると、『ニーベルンゲンの歌』の前史はブリュンヒルト伝説とブルグント伝説から成っている。まずブリュンヒルト伝説は、ライン・フランケンを発祥地として五、六世紀に生じたもので、その後ノルウェー及びアイスランドへと伝承され、そのままの形が九世紀から十二世紀のエッダ歌謡に遺されている。この伝説はそれから十二世紀末に変化を見ることとなり、その変遷は1250年の『ティードレクス・サガ』の散文物語に沈澱しており、さらには1200年のエッダの夢の歌謡、フェロー諸島のブリュンヒルト譚詩及びロシアの求婚者メールヒェンにも影響が残っている。一方、ブルグント伝説も、同様にライン・フランケンを発祥地として五世紀に生じたが、それはその後北欧に伝承されて、九世紀から十一世紀のエッダ歌謡の『アトリの歌』にほとんどそのままの形で

遺されている。この伝説は八世紀頃には、バイエルン・オーストリア地方にも伝承されたが、この第二段階の歌謡の新しいところは、アトリに対する復讐が兄弟たちに対する復讐に変わったことである。この第二段階の伝説は、さらに1160年になってドーナウ地方で新しい改変を見たが、ここで初めて読み物としての叙事詩が発生することとなった。いわゆる『古きニーベルンゲン災厄』がそれであるが、もちろんこの叙事詩は現在遺されてはいない。しかし、これは『ティードレクス・サガ』及びフェロー諸島の譚詩、デンマークの歌謡『クレモルトの復讐』などに影響が残っており、それらから推定されるのである。こうしてブリュンヒルト伝説は二段階を経、またブルグント伝説は三段階を経たのち、両者は1200年頃にドーナウ地方のニーベルンゲンの詩人によって一つに結び合わせられたというのである。

こうしてホイスラーによって打ち立てられた『ニーベルンゲンの歌』の系図は、その理解しやすい簡単な図式のゆえに広く普及して数多くの賛同者を見出していったが、もちろんホイスラーと異なって『ニーベルンゲンの歌』の前史を打ち立てた研究者がいないわけでもなかった。例えば、ウェスレ (Carl Wesle)、クラーク (Dietrich Kralik) 及びヴァイス (Kurt Wais) 等による研究⁵⁾がそれであり、彼らの標語は何らかの方法で「ホイスラーを越える」ということであつたが、しかし、いずれにも問題が残されていて、今のところホイスラーの系図を揺がす見解はまだ出ていないというのが実状である。もちろんホイスラーの発展段階説にしても、これは全くの推論であり、遺されていない英雄文学をのちの北欧伝承テキストに基づいて推定しているに過ぎない。英雄文学は常に流動的である筈であり、『ニーベルンゲンの歌』の生成過程はホイスラーが再構成したよりももっと複雑なものであつたであろう。従つて、ホイスラーが認めたとよりもっと多くの失われた歌謡が考慮されるべきであろうが、しかし、ホイスラーの発展段階説は『ニーベルンゲンの歌』の生成過程の縮図であり、一つのモデルとして容認されてもよいのではあるまいか。このホイスラーの研究によって素材史的研究はともかくも揺るぎない礎石を置かれたとすることができるのである。

4. 最近の研究状況

このように北欧文学に手がかりを見つけたホイスラーの研究に対して、『ニーベルンゲンの歌』の研究を全く新しい基礎の上に打ち立てたのがパ

ンツァー (Friedrich Panzer) である。1945年に発表された彼の研究書『ニーベルンゲンの歌研究』(Studien zum Nibelungenliede) が明らかにしていることは、『ニーベルンゲンの歌』は特にフランスの文学作品に強く結びついており、例えば、ジークフリートの死と埋葬についての描写はプロヴァンスの武勲詩『ドーレルとベトン』を手本にしたものだという。このフランスの素材を指摘した点がパンツァーの第一の重要な成果であるとするれば、第二の成果は、『ニーベルンゲンの歌』においては同時代の歴史が、これまで信じられてきたよりも、かなり多く反映されているというテーゼである。例えば、ベッヒェラーレンでの牧歌(第二十七歌章)は、フリードリヒ一世がその十字軍の旅の途中ハンガリーのベーラ王とその妃マルガレータのもとで体験した出迎えの場面の優美な叙事詩化以外の何ものでもないという。さらにパンツァーの第三の成果は、『ティードレクス・サガ』の作者は『ニーベルンゲンの歌』を知っていて自らの作品のために利用したという見解である。従って、ニーベルンゲン叙事詩の前史、特に『古きニーベルンゲン災厄』の再構成のために主な資料として『ティードレクス・サガ』が用いられることは適切ではないとパンツァーは主張するのである。

パンツァーがこの著書において主張していた見解は、その後1955年の研究書『ニーベルンゲンの歌 — 成立と形態』(Das Nibelungenlied. Entstehung und Gestalt) においてさらに受け継がれていったが、このパンツァーの見解はもちろん反論を見ずにはいなかった。確かに彼の第一の業績であるフランスとドイツの英雄叙事詩との間に見られるモチーフ上の一一致は、疑われえない事実ではあるが、しかし、唯一可能な説明であるとは限らない。例えば、シュナイダー (Hermann Schneider) は、「ある中世文学作品が疑いもなく他の作品に影響を及ぼしたからといって、それは直接的な文学的依存関係の証明とはならない。接触は他の方法で生じたこともありうる⁶⁾」と述べている。パンツァーの第三の業績である『ニーベルンゲンの歌』と『ティードレクス・サガ』との関係についても、確かに『ティードレクス・サガ』の作者が十三世紀半ばにおいて一躍有名になった『ニーベルンゲンの歌』の存在を知らなかったということは、実際ありえないことであるが、しかし、『ティードレクス・サガ』の方が『ニーベルンゲンの歌』よりニーベルンゲン伝説の古い特徴を残していることは事実である。従って、ローゼ (Gerhart Lohse) が1959年の論文において、『ティードレクス・サガ』の主な手本は恐らく『古きニーベルンゲン災厄』

であったろう⁷⁾という結論に逆戻りしていることもまた頷けるのである。

パンツァーの業績は、こうして受け容れがたいところもあり、問題点も多いのではあるが、しかし、のちのニーベルンゲン研究に大きな影響を与えたことは疑われない。最近になって『その時代におけるニーベルンゲンの歌』という表題の研究書——例えば、ノイマン (Friedrich Neumann: Das Nibelungenlied in seiner Zeit.1967) 及びファルク (Walter Falk: Das Nibelungenlied in seiner Epoche.1974) 等——が見出されるのも、パンツァーの研究に支えられていることは明らかである。その意味においてパンツァーの研究は、二十世紀のニーベルンゲン研究において、ホイスラーの研究とともに、もう一つの大きな画期的な業績であると言っても過言ではあるまい。

こうしてパンツァーの功績によって『ニーベルンゲンの歌』研究に新しい課題、すなわち、『ニーベルンゲンの歌』とその成立時代との関係について論ずるといふ課題が与えられ、それによって研究もホイスラー的研究から解放されて多種多様となっていたのである。こうして多様化された最近の研究を一言でまとめるのは困難なことであるが、ただ方向づけとして一つだけ明確に言えることは、それらは作品の全体解釈をめざしているということである。すなわち、『ニーベルンゲンの歌』を一連の素材伝説の一部として見ることはふさわしくない、むしろ本質的に中世の文学作品として分析され解釈されねばならないという主張が強まっているのである。もっともそのような全体解釈は、別段最近になってからのことではない。すでに1921年にはケルナー (Josef Körner)⁸⁾によって試みられているし、1927年にはノイマン (Friedrich Neumann) が研究方法に関して「『ニーベルンゲンの歌』は他の中世文学作品と同じように中高ドイツ語時代から理解されねばならない。……『ニーベルンゲンの歌』は、十三世紀初期の人々——彼らはそれをその前史の形としてではなく、中高ドイツ語の文学作品として見た——によって読まれたと同じように、読まれなければならない⁹⁾」と述べている。このノイマンの言葉の中には新しい研究方法の目的が明確に述べられているが、しかし、そのような要求は、当時としてはホイスラーの研究の背後に隠されたままだったのであり、一般的賛同をもって人々に迎えられたのは、第二次世界大戦後において、上記のパンツァーの研究以後のことなのである。

そのような新しい研究の中でまず注目されねばならないのが、シュレーダー (Walter Johannes Schröder) の1954年の研究論文『ニーベルン

ゲンの歌 — 解釈の試み』(Das Nibelungenlied. Versuch einer Deutung)であろう。この論文の方向づけはすでに副題から明らかである。シュレーダーが強調していることは、要するに、もはや歴史的・発生的方法に従ってではなく、逆に作品そのものから成立を振り返りながらその作品の意味を追究することである。すなわち、テキストにおける矛盾を素材伝説から解明することは問題の解決ではなく、単なる問題の回避に過ぎない。むしろテキストが間違いなく述べていること、つまりは文学作品そのものから出発すべきであり、作品の構造を分析することによってその文学作品の意味を探り出すことを主張しているのである。さらにこのシュレーダーの研究は、アルトゥース・ロマーンと比較することによって同時代における『ニーベルンゲンの歌』の価値を追究しており、作品解釈をめざして包括的な研究への第一歩を踏み出したところに大きな意義があると言えよう。

このような『ニーベルンゲンの歌』の包括的な全体解釈として次に是非とも挙げなければならないのは、ヴェーバー (Gottfried Weber) の1963年の研究書『ニーベルンゲンの歌 — 問題とイデー』(Das Nibelungenlied. Problem und Idee)であろう。この序論において著者は素材史的方法に関してこう述べている。「確かに素材史的方法では多くのことがなされ、価値ある成果をあげてはいるが、しかし、それは伝説の歴史にとってであって、十三世紀初頭の文学作品『ニーベルンゲンの歌』の本質を認識すること、つまり、その作者の芸術的意図と精神的立場を解明することにとっては成果をあげているとは言えない。」要するに、ヴェーバーにとって問題なのは、ニーベルンゲンの詩人が二つの伝説を結びつけたとき、いかなるイデーが詩人を導いたか、ということである。ヴェーバーは、すなわち、中高ドイツ語のニーベルンゲン叙事詩における宮廷的・騎士的なものの意味を強調し、宮廷的・騎士的なものは外的装衣と時代的色彩以上のものであり、それは内在的な叙述意図と強く結びついているとして、個々の分析を全体解釈へと結び合わせており、その研究は『ニーベルンゲンの歌』の精神史的立場の問題に答えることでもって頂点に達している。

ヴェーバーと同じような見解から出発しているのがイーレンブルク (Karl Heinz Ihlenburg) の1969年の研究書『ニーベルンゲンの歌 — 問題と内容』(Das Nibelungenlied. Problem und Gehalt)である。イーレンブルクも宮廷的世界の幻滅を強調して、ニーベルンゲン悲劇を作品成立当時の時代から考察しているが、しかし、その研究はさらにラディカル

に論を進めて、『ニーベルンゲンの歌』で起こる悲劇をその時代の社会的・政治的事情に結びつけてさえている。

このようなニーベルンゲン詩人の文学的意図を強調する新しい研究方法に対して、もちろん反対意見もないわけではない。例えば、ヴェーリリ (Max Wehrli) やフロム (Hans Fromm) の意見に代表されるように、そもそも『ニーベルンゲンの歌』を貫通する「イデー」なるものは存在するのか、そもそも世界観的な叙述意図をニーベルンゲンの詩人に求めるのは過大な要求ではないのかという疑問の声もあるのである¹⁰⁾。このような意見は、テキスト分析によって作品を解釈しようとする研究方法に対する警告として見なすことができよう。確かにまず作品成立当時の時代から出発し、作者の意図と同時代の聴衆及び読者の受容動機を問題にしてみることは文学研究の重要な課題ではあるが、しかし、殊に『ニーベルンゲンの歌』のような複雑な成立事情を含んでいる作品の研究はその成立当時の時代に限定されるままであってはならないこともまた明らかである。『ニーベルンゲンの歌』の包括的全体解釈は、だから、今のところ多くの問題点を残していることもまた事実であり、ともかくも多角的な研究が必要であると言えよう。それほどに『ニーベルンゲンの歌』は奥行きが深い古典的作品なのである。

今後の課題

以上のように見てくると、最近における『ニーベルンゲンの歌』の研究は、特にパンツァーの画期的な研究の影響下で、この叙事詩をニーベルンゲン伝説の一部としてではなく、ドイツ中世文学作品として分析し解釈する傾向にあると言えよう。なかでもヴェーバーは、上でも引用した言葉に続けて、「素材に目を向けてしまうことはともかくも文学作品の純粋な認識を濁らせてしまう」と述べている。要するに、ヴェーバーの研究立場は、この作品における素材は二次的なものであって、それよりも大切なのはその二つの伝説を一つにまとめた十三世紀初頭の詩人のイデーだということである。『ニーベルンゲンの歌』がもはや古代ゲルマン英雄歌謡の単なる集積ではなく、十三世紀初頭の一人の詩人によって創り上げられた作品である限り、我々の研究も、今や『ニーベルンゲンの歌』を中世叙事詩として取り扱い、その詩人の文学的意図の解明をめざす方向へと進むべきであるが、しかし、『ニーベルンゲンの歌』は、上で見てきたように、複雑な成

立事情を含んでいる作品であり、詩人の意図を解明するためには、従来のホイスラーによる素材史的研究の成果を前提としなければならないことは言うまでもない。常に素材史的研究の成果を考慮に入れながら、十三世紀初頭に成立した『ニーベルンゲンの歌』のテクストそのものをさまざまな角度から考察することによって初めてニーベルンゲンの詩人の文学的意図なるものが理解できるのではあるまいか。我々は素材史的研究と全体解釈の研究とを切り離すのではなく、両者を一つに融合して考察を進めてゆくべきである。従って、我々の研究の今後の課題は、一言で言えば、素材と叙事詩人との内的関係であると言えよう。何の目的で詩人は古代ゲルマンの素材に改作を施し、自らの作品を創り上げたのか、いわばその詩人の文学的意図とその精神的立場を解明することによって、十三世紀初頭に生じた中世叙事詩としての『ニーベルンゲンの歌』の特異性を追究することである。そのためには我々は今や『ニーベルンゲンの歌』を当時のほかの宮廷叙事詩と比較考察してみる必要もあろう。とにかく民族移動時代の英雄伝説から複雑な成立過程を経て、十三世紀初頭に中世叙事詩として成立した『ニーベルンゲンの歌』を研究するためには、今や総合的な視野に立って考察を進めてゆかなければならないのである。

* 本稿は平成元年度徳島大学教育研究学内特別経費による研究成果の一部である。

註

- 1) 以下、ニーベルンゲン研究史をまとめるにあたって、主に次のものを参照する。
Gottfried Weber: Nibelungenlied (Heldendichtung II). Stuttgart 1961.
Werner Hoffmann: Das Nibelungenlied. 5. überarbeitete und erweiterte Auflage des Bandes Nibelungenlied von Gottfried Weber und Werner Hoffmann. Stuttgart 1982.
- 2) Friedrich Zarncke(Hrsg.): Das Nibelungenlied. 1856. (Max Niemeyer) Halle 1920.
Adolf Holtzmann(Hrsg.): Schulausgabe des Nibelungenlieds in der ältesten Gestalt. 1857. (J.B. Metzler'sche Buchhandlung) Stuttgart 1863.
- 3) Karl Bartsch(Hrsg.): Der Nibelunge Nôt I, II, III. 1870-80 (Nachdruck, Hildesheim 1966)

- 4) Vgl. Andreas Heusler: Nibelungensage und Nibelungenlied. Dortmund 1921. (Nachdruck, Darmstadt 1973.) S.49.
- 5) Vgl. Gottfried Weber: a.a.O., S.12f. (=Werner Hoffmann: a.a.O., S.16ff.)
- 6) Hermann Schneider: Forschungsbericht. Die Quellen des Nibelungenliedes. Zu Friedrich Panzers Studien zum Nibelungenlied 1945. Euphorion 45,1950. S.495.
- 7) Gerhart Lohse: Die Beziehungen zwischen Thidrekssaga und den Handschriften des Nibelungenliedes. Beiträge 81,1959. S.295-347.
- 8) Josef Körner: Das Nibelungenlied. Leipzig • Berlin 1921.
- 9) Friedrich Neumann: Das Nibelungenlied in der gegenwärtigen Forschung. DtVjs.5,1927. S.163.
- 10) Vgl. Werner Hoffmann: a.a.O., S.28f.

Probleme in der Forschungsgeschichte des Nibelungenlieds

Eisaku ISHIKAWA

Das Nibelungenlied ist seinem Stoff nach ein altgermanisches Heldenepos, gehört aber nach der Zeit seiner Entstehung und der inneren Haltung seines Dichters zu den höfischen Dichtungen der Stauferzeit. Wegen dieser eigentümlichen Situation sind die bisherigen Untersuchungen über das Werk weitverzweigt und verwickelt geworden. Nun möchten wir, die Forschungsgeschichte verfolgend, die Richtung unserer künftigen Erforschung bestimmen.

Aus dem Überblick der Forschungsgeschichte ergibt es sich, daß das Anliegen der früheren Forschung ausschließlich auf die Entstehungsgeschichte des Nibelungenlieds beschränkt war, und daß man heutzutage aber namentlich unter dem Einfluß Friedrich Panzers das Nibelungenlied nicht als ein Stück Nibelungensagen, sondern als eine um 1200 entstandene Dichtung zu beobachten versucht. Gottfried Weber z. B. behauptet, der Blick auf die Quellen trübe die reine Erkenntnis des dichterischen Kunstwerks. Kurz gesagt, der Nibelungenstoff sei nur eine Nebensache: noch wichtiger sei die Idee des Nibelungendichters, der die Brünhildsage und die Burgundensage zusammengefügt habe. Solange das Nibelungenlied nunmehr keine einfache Sammlung der altgermanischen Heldensagen ist, sollen wir auch das Werk als eine mittelalterliche Dichtung behandeln und den künstlerischen Willen des Dichters aufzuhellen versuchen. Dazu bedürfen wir aber natürlich der stoffgeschichtlichen Ergebnisse von Andreas Heusler. Zur Forschung nach der Idee des Nibelungendichters müssen wir, stets die stoffgeschichtliche Methode in Betracht ziehend, das Nibelungenlied von allen Gesichtspunkten betrachten. Die stoffgeschichtliche Methode und die Gesamtdeutung sollen jedenfalls nicht getrennt, sondern vielmehr harmonisch verbunden werden. Unsere künftige Aufgabe besteht also in der Erklärung des inneren Verhältnisses des Dichters zum Stoff. Dabei ist es aufschlußreich, das Nibelungenlied

mit den damaligen höfischen Dichtungen vergleichen. Das Nibelungenlied, dessen Entstehungsgeschichte ganz und gar kompliziert ist, soll nunmehr auf dem umfassenden Standpunkt untersucht werden.